

影なる王女



第七章

終末の時が来た。
わが麗しき友が。
終末の時が来た。
わが唯一の友が。

殺人者は夜明けに目覚め、ブーツをはいた。
古代の美術館を飾る仮面を着け、
回廊を忍び歩き、
かつて妹が暮らしていた部屋を訪れ、
次に弟の部屋を訪れ、
さらに回廊を歩き、
そのドアの前に立った。
ドアを少し開けてなかを覗いた。

父さん、あんたを殺したい。
母さん、あんたを犯したい。

殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！

息長皇后は、壁に背をもたせかけ、はだけた裾も乱れたまま、稚建皇子を見つめていた。ほの暗い灯火に照らされたその眼には、怯えと不安、虚勢と挑発が入り交じり、皇子の口を閉ざさせた。

髪はほどいて背に垂らし、額に白布を巻き、白の貫頭衣に茜色の巾スカーフ、首には曲玉まがたまを垂らし、神に侍する巫女かんなぎのように装っていた。

その傍らには、大王家に伝わる三つの宝——神劍、神鏡、神璽が、さきほどの狼藉で無惨に散らばっている。

「稚建皇子……」

先に口を開いたのは皇后だった。乱れた姿勢を正そうともせず、豊かな乳房が大きく上下していた。

「吾を殺しにきたか……」

男に姦おかされる女は、こんなふうに関手を見上げるのだろうか……。皇子はふと、そんな

ことを思った。

「吾は先の大王の皇后にして、日継の皇子たる汝が母。汝は、母なる皇后の宮を兵で汚し、吾を害せんとするか！」

いつも、このように叱られてきた……。だが、叱責していても、その口振りは弱々しく、眼は不安げに揺れている。

皇子は静かに口を開いた。

「吾が母なる皇后は、日継の皇子たる吾を害せんとした」

「兵を住吉に遣わしたのは、平群と葛城。吾は知らぬこと」

皇子は口を噤んで応えなかった。

何も知らされてはおらぬ……。皇后は、皇子の沈黙をそのように受け取った。

「汝は病に臥せていたと聞いた。大伴金村は、平群や葛城に本邸を襲われたを幸い、敵対する彼等を滅ぼし、彼等が吾が命を受けていたと偽りを言い立て、汝の名によって軍を起こし、この王宮に差し向けた。吾を害し、大王家にかわってヤマトを掌中に収めようとする謀はかりごとである。皇子、汝は騙されている」

「皇后……」

皇子は静かに膝を突き、まっすぐに皇后の眼を覗き込んだ。皇后は狼狽えた。

皇子の眼には、なんの動揺も宿ってはいなかった。風の海のように静かだった。

「金村が如何なる謀をたくらむか、吾は知らず、知ろうとも思わない。吾が知りたいのは

ただひとつ……」

皇子の瞳がはじめて、かすかに揺れた。

「吾田媛のこと」

皇后の面もちが蒼く強張った。

「皇后は……吾田媛を殺したのか……」

「誰より、そんなことを……」

皇后の肩が細かく震えていた。

「稗田阿礼」

皇子は、唇が接するばかりに貌を近づけた。皇后は眼を逸らし、壁に硬く背を押し付け、少しでも皇子から離れようとした。

「稗田阿礼は十六年前に死んだ」

「然り。十六年前、皇后に眼を潰され、舌を切られ、左右の手を切られた。しかし、阿礼は生きている」

「いづくに……」

皇子は応えず、静かに皇后の肩に手をかけた。皇后の四肢が、びくりと痙攣した。

「いま一度、問う。吾田媛を殺したのは、皇后か……」

皇后は、じつと壁の一点を凝視したまま黙っていたが、やがて、ゆっくりと貌を動かして皇子を見た。

「それを知って、如何にする」

皇子はうつむいた。

「汝が会うたという稗田阿礼。その者の言がまことであつたとして、汝は皇后を如何にする」

やはり、まことであつたのだ……。稚建皇子は眼を閉じた。腹の奥底からこみあげた熱い滾りが、皇子の四肢を走つた。

皇子は息をひとつ吐き出し、眼を開けた。

皇后の、しどけなく乱れた裾から、白い脚が伸びていた。布に覆われていても、烈しく上下する豊かな乳房が、大きな膨らみを見せている。

もはや、この女は、崇めるべき母でも、従うべき母でもない。先の大王を殺し、母を殺し、妹を押し込め、多くの皇子皇女の命を奪い、大王家を衰微させ、ヤマトを乗っ取ろうとした逆賊に他ならない。

皇子は、腰に提げた剣を抜き、その切っ先を皇后の貌に向けた。

皇后は身を竦め、瞼を閉じ、小さく叫んだ。叫ぶより早く、皇子は剣を突き出した。

皇后の頬に、うつすらと血が滲んだ。

皇子の剣は、皇后の貌をわずかにかすめ、その背後の壁に突き立った。

皇子は立ち上がった。

皇后はやつと眼を開け、頬の血を指で濡らして見、そのすぐ傍ら、壁に突き立ったまま

の剣を見、さらに怯えた眼で皇子を見上げた。

皇子は、腰の帯を解いた。皇后の鼻先に、隆々とそそり立った白い陽物が突きつけられた。

「口に含め」

皇后が何か言いかけるより早く、皇子は皇后の髪の毛を掴み、その貌を己が股間に押し当てた。硬く屹立した陽物の先端が、閉じようとした唇をこじあけて侵入し、喉の奥に当たった。皇后は苦しげに呻いた。皇子は容赦なく、腰を前後に動かし始めた。

「汝は、吾が母を殺した」

こみあげる快に息を乱しつつ、皇子は叫んだ。

「汝は先の大王を殺し、押葉皇子をはじめ、多くの皇子皇女を殺した」

皇子の陽物は、生暖かな喉の肉に包まれ、ますます猛り狂った。皇后は、髪の毛を捕まえたまま身動きもできず、涙をこぼし、喉の奥から哀願するような呻きを漏らした。その呻きが、皇子の欲望をさらに高ぶらせた。

「汝は大逆の罪人である。汝を生かすも殺すも、日継の皇子たる吾が意のまま」

叫ぶと同時に、皇子の陽物から精が迸り、皇后の口中には治まらず、顎を濡らし、巫女の装束を汚した。皇后は口を掌で押さえ、身を折って激しく噎せた。

皇子は荒々しく、髪の毛をつかんだまま皇后をうつぶせに倒し、衣を引き裂き、犬のように両手と両膝を突いた皇后の尻を両手で押さえ、陽物の先端を陰にあてがい、深く沈めた。

た。

皇后は身を反らし、絶叫した。

「いまだ皇子は戻らぬか……」

篝火が盛大に焚かれるなか、王宮の広庭には討たれた兵の屍が堆く積み上げられていた。

「よもやとは思うが……皇子に何かあったのではないか、やはり、兵を入れて探らせるべきではないか」

大伴羽生は、腕組みをしたまま動かない兄の金村をやかましく促した。

策の多い兄とは異なり武ばった男だが、謀の分からぬほど愚かではない。いま、廟堂の奥には、稚建皇子と息長皇后しかいない。かのひよわな皇子が、したたかな皇后に翻弄されぬとも限らない、と羽生は言い立てた。

だが、金村は首を振り、顎で廟堂の扉を指した。

固く閉ざされた扉の前に、影皇女が腰を据えている。その足下には、両手を後ろ手に縛られた宮女の八須女が、苦しげに呻いて転がっていた。

「幾十、否、幾百の兵を持ってしても、あの皇女を守る扉を開けるのは、難しい」

「言い聞かせればよい」

「すでに言い聞かせた。だが頑なに動かない」

「では、吾が説く」

羽生は足音も荒く廟堂の階をあがり、影皇女に対峙した。

「皇女……」

さすがに口調を改め、拝礼した羽生を、影皇女は訝しげに見つめた。

「皇女はいまだ戻られぬ」

皇女はちらと背後を振り返り、うなずいた。どうやら、こちらの言うことは分かるらしい。羽生は笑みを作って身を乗り出した。

「兵を廟堂に入れ、皇子の安否を確かめたい」

皇女は眉を潜め、首を振った。

「皇子の御身が、危ういかもしれぬ」

羽生はなおも言い募った。その腹部をめがけて、皇女は拳を打ち込んだ。羽生は軀を強張らせて呻き、階を転げ落ちた。急所を突かれ、両手で股間を押さえ、ぶざまに苦しみもがいている。羽生の手兵が、矛や腰の剣に手をかけた。

「やめよ！」

金村は兵どもを制し、苦々しげにうつむいた。

数人の兵が、起きあがることもできずに悶絶する羽生の巨体を輿に載せて運び出した。

影皇女は、稚建皇子にのみ従う。

稚建皇子は、必ずしも大伴に従わない。

その稚建皇子は、息長皇后を如何するつもりか。

先が見えぬ……。金村は苛立ち、足下の枝をそっと踏み折った。

皇后の寝屋を、饅えた匂いが覆い尽くしていた。

影皇女に斬られた三人の兵の血の匂い。そして……。

稚建皇子は、壁にもたれ、うつろな眼を天井の梁のあたりに彷徨わせていた。傍らには、息長皇后が、白い全裸をさらし、うつぶせに臥せ、眼を閉じたまま身じろぎもなかった。

ついに……。

皇后の口と陰から、白く濁った液が垂れていた。

吾は、皇后を姦した。

そのまぐわいは、春日郎女の寝屋での秘め事とは、まったく異なっていた。郎女の寝屋で、皇子は郎女の意のままに姦された。

そして今宵、皇后の寝屋で、皇子は思うままに皇后を姦した。

皇子の眼に、寝屋の隅に散らばった神劍、神鏡、神璽が映った。

大王にのみ所有を許される三つの宝。

ふと皇子は、この十六年、ヤマトには大王がいなかったことに気づいた。息長皇后は、稚建皇子が「壮齢となるまで」代わりに政事を司っていたにすぎない。

果たして、皇子は「壮齢」に達したか。否、「壮齢に達したか、否か」を誰が決めるの

か。

今までならば、誰が決めるかは明らかだった。

息長皇后と大伴金村が決める。だが今は？

皇子は、散らばった三つの神宝を拾い集めた。神劍——刃の左右から三つずつ枝が生えた七枝の劍。鏡——青銅で鑄られ、その縁は竜で象られ、遙か昔、海の彼方の魏なる国より賜ったとの銘が刻まれている。神璽——薄緑色の勾玉。

皇子はしばし神宝を見つめ、それから眼差しを皇后に向けた。

白い背や尻を見せ、かすかにも動かないでいる豊満な三十路の女は、これらの宝を有していたわけではない。預かっていただけである。

皇子に、背後より姦され、悲鳴と呻きをあげながら苦しげに身を振っていた皇后は、やがて快に身を委ね、歓喜の嗚咽を洩らし、自ら求めるように下肢を動かした。皇子がその豊かな乳房を揉みしだくたびに、雷に打たれたように身を反らし、皇子が体液に濡れた陽物をその厚い唇の押し当てれば貪るように吸った。

皇子は、皇后にそうしたように、春日郎女とまぐわえばどうか、と思った。陰陽を互いにあいふたぎ、ともに快を尽くし……子をなす。

ふぐり玉を一つ失つても、皇子に子をなす力が残されていることは、すでに証された。

春日郎女との間に子をなそう……。皇子、皇女、できうるかぎり多くの子を産ませよう。

息長皇后のように、一人の皇子を大王の御位に即けるために、他の皇子や皇女を抹殺し、

大王家を衰微させ、大伴金村ら豪族の力に頼らねばなくなるような愚は、決しておかすまい。

多くの皇子皇女を生ませ、健やかに育て、彼等が壯齢になればおのおの田を拓かせ、他の国々と交易させ、自らの財や兵を養わせよう。大王家が、他の豪族に超越する財と兵を有すれば、豪族どもは大王家に付き従い、互いに争わず、国の乱れも起こるまい。史人に偽りの国史を書かせ、偽りの崇拜を強要することはない。いくらうわべを飾り立てても、いずれ悪逆の罪は露見する。

「吾は……」

皇子は口に出して呟いた。

「大王の御位に即く」

皇子の四肢に、新しい力が漲ってくるのを覚えた。その力は、一人の女を姦したことによって生まれ出でたことに、皇子は気づいていない。

皇子は寝屋を見回した。神宝を納めていた籠が隅にあった。皇子は、三つの神宝を籠に入れて蓋をした。

「今宵よりは、吾が宮に納めよう」

それから、皇后の傍らに膝を突いた。つくづく、寝乱れた髪に覆われた横貌を眺めた。長い睫が、皇子が放った精の雫で濡れていた。唇が、女童のように半ば開いている。

皇子の唇に笑みが浮かんだ。勝った……。吾は、皇后に勝った。

満たされた心地でため息をつき、立ち上がろうとして、股間に鋭い衝撃が走った。皇后の腕が伸び、右手が、皇子の股間を掴んでいた。残されたひとつのふぐり玉は、皇后の掌中であつて、平たく形が変わるまでに強く圧せられていた。

「大王の御位に即く……と言うたな」
皇后が貌かほを上げ、皇子を見つめていた。その眼はぎらぎらと輝き、唇が不敵に歪よこんでいた。

「即くがよい……しかし」
皇后は容赦なく、爪を伸ばした指を、柔らかな肉塊にのめり込ませた。皇子は半身をのけぞらせ、激しく痙攣した。

「子をなさぬ大王など、誰が従おう」
肉の裂ける音が鳴り響いた。

皇子の軀じゆうに引き裂かれるような激痛が走り、視界は暗く閉ざされ、苦いものが奥底よりこみ上げ、口腔より迸ひびった。

廟堂の扉が二度、内側より叩かれた。

影皇女は弾かれたように立ち上がった。

「あ……に……!!」

大伴金村も兵どもも、一斉に扉を見た。影皇女は扉に取りついて開け広げ、それから一、二歩、後ずさった。

「汝が兄は……」

現れたのは、息長皇后だった。

「吾が寝屋に臥せている」

影皇女は眼を見開いて、皇后を見つめた。髪は乱れて貌の半ばを覆い隠し、ところどころ引き裂かれた巫女装束をまとい、冷たく皇女を見据えている。

「深手を負っている。疾とう助けねば、死ぬやもしれぬ」

影皇女は両手で己が頭髪をつかんで搔かきむしり、悲痛な叫びを發した。皇后を突き飛ばし、廟堂の奥へと駆け入った。

皇后はよろけて階を転げ落ち、広庭に這いつくばった。大伴の兵どもが、遠巻きに皇后を囲んだ。

「誰か、皇女を追え！」

大伴金村が叫んだ。大伴真嚙が応え、十数人の兵を連れて階を駆け上がり、扉の奥へ消えた。

「皇后……」

大伴金村が、地に下肢を横たえて半身を起こし、うなだれて荒く息をつく皇后の傍らに膝を突いた。

「金村」

不意に皇后は貌を上げた。金村は思わず身を引いた。惨めないでたちとは異なり、皇后の面もちは、勝ち誇っていた。

「皇子は、四度……否、五度、吾が陰に精を漏らした」

皇后は、金村の耳元に唇を擦り寄せ、囁いた。

「五度、精を漏らした後、吾が手でふぐり玉を潰した」

金村は、顔を強張らせて皇后を凝視した。

「子をなさぬ皇子を、大王の御位に即けるか」

廟堂の奥に、獣のような咆哮が轟きわたった。影皇女の声だった。

「それとも、あの皇女を女王とするか。あるいは再び兵を起こし、北の高志に遣わして、三世の王孫を探し出すか」

あるいは……。金村は皇后の腹部に眼を走らせた。

大伴真嚙が駆け戻ってきて、蒼白の面もちで喚いた。

「医師は……医師はおらぬか！」

兵長どもが口々に、医師は、医師は、と喚きながら右往左往した。

「あるいは吾が軀の裡に……」

皇后は喉を鳴らして笑った。

「稚建皇子の子が宿ったかもしれぬ」

「誰か、興を！」

金村が立ち上がって叫び、再び膝を突いた。皇后を囲んでいた兵どもも、金村に倣って一斉に拝礼した。

「逆賊、平群と葛城の一族は、すでに滅びた。すでにヤマトは平らかなるが、王宮は血で汚された。皇后よ、今宵は吾が住吉の邸に行幸されよ」

皇后は冷たく笑い、立ち上がった。金村は、その眼差しから貌を逸らし、背後の兵に命じた。

「疾う興を、皇后を吾が邸へ！」

「汝のその変わり身の早さよ……」

息長皇后は金村の肩に手を置いた。

「汝はやはり、大王家の御盾。自ら王にはなれぬ男」

秋は過ぎ、冬の訪れを伝える木枯らしが、難波の東なる生駒の山中の樹々を揺らしていた。

これより、いづくへ……。

倒れた古木の洞に疲れ切った身を潜めて寒風を避けながら、葛城韓媛は思案にくれた。山を越えれば飛鳥の地。そこよりさらに東へ……。

否、東の国はかつて、兵を率いて攻め荒らした地。

あるいは尾根づたいに北へ……。淡海に到り、比叡の山を越えて且波に赴くか……。やがて冬となる。それまでにヤマトの大王家の版図の外に出で、山を降りねば、凍えて死ぬしかない。

韓媛が、平群鮪とともに住吉の相伴の本邸を攻め、多くを討たれて撃退されてより、五日がたっていた。いまだ、里にも山裾にも、残党狩りを命じられた兵の群や、駆り出された民人の姿が絶えない。

すでに目立つ甲冑は脱ぎ捨てた。里の家から盗んだ貫頭衣をまとい、民人らしく装ってはいても、輝かしい武功を樹てた韓媛の貌は、ヤマトじゅうに知れ渡っている。身に帯びた武器は懷中に潜めた短剣一つのみ。敵兵を斬り伏せ、民人に追われて彷徨ううちに、腕にも脚にも生傷を負ったその姿は、一目で逃散者と知れた。

相伴の本邸を抜け出した韓媛は、闇を縫って葛城の本邸に辿り着いた。そこで見たものは、黒煙を吹き上げて燃えさかる邸と、それを囲む幾百の敵兵であった。

韓媛は逃げた。父なる葛城田、愛おしい母、兄たちや幼い弟や妹。親族の安否を知らぬまま、山中を漂った。

父や兄が、たやすく討たれるはずはない……。葛城は古より、武で大王家に仕えた家。やがて東国に残していた兵も戻り、いずれ相伴と一戦があるはず。その時までには生き延びねばならぬ……。その思いを支えに、厳しい夜の寒さにも、脚を弱らせる道なき道にも耐えてきたのだ。

「あと幾日、山狩りを続けねばならぬのだ」

不意に人の声をした。

そつと洞から覗くと、三人の兵が、窪地に腰を下ろして竹筒の水を呑んでいた。

「すでに平群も葛城も滅びた。かの女將軍一人、取り逃がしたところで、相伴の勝ちは動くまいに」

その言葉に、韓媛は拳を握りしめた。貌の皮膚が冷たく強張り、喉に乾きを覚えた。

滅びた……。平群も葛城も……。

「山に逃げたというが、やがて冬。餓えて野垂れ死ぬに違いないが、吾等が阿部の家は、遅れて相伴に着いたゆえ、努めて功を樹てたいのであるう」

「逃げるなら、里に潜めばよいものを。さすれば、攻めに紛れて、米を奪い、女を姦すこともできように、かような山中ではそれも叶わぬ」

兵たちは声を揃えて笑い、不意に笑いを止めて竹筒を取り落とした。

「山中にも、女はいる」

葛城韓媛が、三人の前に立ちはだかっていた。

「しかし、汝等に姦されはしない」

言うなり、韓媛は剣を抜いて立ち上がった兵に駆け寄り、膝をあげて股間に叩き込み、呻いて身を折る兵の剣を奪い、振り向きざまに斬りかかってきた兵の首を、横薙ぎに落とした。

残る一人は悲鳴をあげ、踵かかとを返して逃げ出した。その背をめがけて韓媛は剣を投げた。剣は兵のうなじに刺さり、喉まで貫いた。

股間を蹴られた兵は、仰向けに倒れたまま悶えている。韓媛はゆっくりと兵に歩み寄り、腹部に跨またがり押さえつけた。右手を伸ばして、股間を掴む。ふぐり玉を握られ、兵が悲鳴をあげる先に、喉輪を押さえて叫びを封じ込んだ。

「汝はさきほど、葛城はすでに滅びたと言った」

兵は涙をこぼし、貌を左右に振りながら、口を動かそうとした。韓媛は、喉とふぐり玉を押さえつけた手を緩めた。

「言え、葛城は如何した！」

「……死んだ……」

「如何ように死んだ！」

「邸とともに……焼けた……」

「母……円が妻は！」

「共に……焼けた……」

「その子らは！」

「韓媛の他は……一人残らず討たれた……」

「男童や女童もか！」

「老若男女……残らず……」

その言葉を最後に、兵は四肢を激しく痙攣させ、血反吐をはいで動かなくなった。韓媛の掌てのひらのなかで、兵のふぐり玉は微塵みじんに砕けた。

父も母も、焼け死んだ……。兄も……幼き妹や弟も……。

韓媛はよろよると身を起こし、歩みだそうとして、その場に座り込んだ。

しばし後、新たな兵の足音が茂みをかき分けて近づいてくるまで、韓媛は凝然と動かなかった。

勝った……。

否いな。

勝ったかどうかはまだ分からない。

少なくとも、負けはしなかった。

生き延びた……。

住吉の太伴の本邸にある稚建皇子の宮の寢屋に、息長皇后は絹の褥しじふに坐し、髪を梳くしけずっていた。

ふぐり玉を潰された皇子は、春日郎女の寢屋に運び込まれた。宮に住まうていた春日郎女と影皇女は皇子の傍らを離れず、宮は息長皇后の専有するところとなった。

宮の周りを、幾十の兵が矛を携えて寝ずに立っている。皇后が逃げるのを防ぐためでもあり、あるいは、やがて日継の皇子となる胤を孕んでいるかもしれぬ皇后を守る御盾とも

言えた。

あと三月……あるいは四月……。

懐妊したか否か分かるまで、命を長らえることができた。その間に、如何ようにも策は立てられる。

皇后は鏡に己が貌を映しながら、ひとり声をあげて笑った。

疲れているのだ、と大伴金村は自らに言い聞かせた。

金村は常に、どんな事態が起ころうとも、素早く思案を巡らし、策を講じてきた。それ故に、先の大王なき後の過酷な十数年を生き延びてきた。

しかし今宵は、頭のながが凍り付いたように動かない。

春日郎女は、じっと父を見据え、坐したまま動かず、応えを待っている。

かの歌垣の夜、皇子はふぐり玉を潰されつつ、春日郎女の陰に、精を漏らした。そう郎女は告げた。

これを、如何に読むべきか。

皇子が王宮より運び込まれたとき、郎女は半狂乱だった。やがて皇子の容態が落ち着いたとき、郎女は王宮で何が起こったか、金村を問いつめた。

皇子が、皇后を姦したと聞き、春日郎女は怒らず、しばし黙した後、こう言った。

もし、吾が皇子の子を孕んでいれば、その子は日継の皇子となるや？

応えられない金村に、郎女は重ねて問うた。

もし吾も孕み、皇后も孕めば如何？

もし吾は孕まず、皇后が孕めば？

吾も皇后も孕まねば？

静かに問いを重ねる郎女の、片膝を突いてまっすぐに背を伸ばし、冷ややかに父を見据えるその瞳に、金村は不安をかき立てられた。

素直に、泣いてくれれば……。

ふと金村の脳裏に、皇子の傍らに坐す影皇女の姿が浮かんた。

「阿母、雪だ」

比叡の山の、さらに奥深い山中の窪地に立てられた苦屋の戸から、貌を突き出した笹葉が、後ろを振り向いた。

「少し魚が足りぬゆえ、雪が積もる前に、とつてくる」

苦屋の裡で、稗田阿礼は微笑み、頷いた。

薄曇りの空から、白く粉雪が舞い降りていた。今日のうちに積もることはあるまいが、やがて川面に氷が張り、道は雪で閉ざされよう。

薄暗い苦屋のそこかしこに、干した肉や魚、穀物や木の実、薪や炭が堆く積まれていた。冬の間、山中は雪に閉ざされる。冬ごもりの蓄えは怠ることはできない。

獣皮をまとった笹葉が、大股に出て行くのを聞きつつ、稗田阿礼は、傍らに積んだ竹の板を、手のない腕に抱え、口を使って穿たれた穴に糸を通し、竹筒を編み始めた。

この山で、笹葉とともに暮らし始めて十七年。この間、阿礼は笹葉に文字を教えた。聡い笹葉は、阿礼が地面に杖で書いた文字を書き取り、竹筒に写すことを覚えた。阿礼が、幼き頃、稗田の家の蔵でむさぼり読んだ史や諸国の風土、十三歳のとき吾田媛に付き従い、国栖に赴いた一部始終、ヤマトを追われて後、里より漏れ伝わる出来事等を、冬籠もりの間、笹葉に伝え、竹筒に書き記させるのが、娯しみとなった。

視覚と、言葉と、文字を書く手を奪われながら、稗田阿礼は史人でありつづけた。誰のために史を編むでもない。笹葉が、里に下りず山中で暮らしつつも、文字によつて広い世界を知る。そのために史人が在り、文字がある。

「阿母、魚とりはやめた」

戸口に、笹葉の声がした。

「行き倒れだ」

床に、重いものがそつと置かれ、かすかな呻きが阿礼の耳に伝わってきた。

「山道に倒れていた。女だ。民人の装いだが、腕や脚に刀傷がひどい」

笹葉が、褥を床に敷き、担ぎ込んだ女を寝かせる物音に耳を傾けつつ、阿礼は微笑んだ。

「何故に笑う」

笹葉が訝しげに問うた。阿礼は、床の真ん中に穿った炉の灰に、文字を書き付けた。

「ヤマトで乱が起こり、宮処人が逃れて来たというわけか……」

笹葉は、炉を覗き込んで文字を読み、笑った。

「阿母、もつと竹筒を編まねば、書ききれぬぞ」

葛城韓媛が眼を覚ましたのは、すでに山が白い雪に覆われた後であった。

頑なに口を開かない韓媛に、笹葉も阿礼も、何も問わなかった。ただ、傷ついた韓媛の四肢に煎じた薬草を塗り、粥を口に含ませ、火を絶やさず、やがて、韓媛は恢復した。

韓媛が重い口を開いたのは、笹葉が、己が身の上を話してからであった。

「汝は、宮処の兵乱を逃れてきたのであろう」

韓媛は身構えた。手厚く介抱してくれたとはいえ、二人の女が、苦屋に運び込んだ女が葛城の一族と知れば、宮処に訴えでないと限らない。

「名を聞こうとは思わない。吾もまた十七年前、ヤマトの兵乱に親を失い、山に籠もり、阿母に助けられた」

炉にくべた土器に煮立つ粥をかき混ぜながら、独り語りに語る笹葉に、韓媛の冷たく強張っていた心が暖かく緩んだ。

やがて韓媛はうち解け、ヤマトで起こった一部始終を語り始めた。そのいちいちを、阿礼は笹葉に書き記させ、とくに征東の戦や、東の国々の風土に、阿礼は膝を乗り出し、

問いを重ねた。

そして、韓媛は、阿礼が自ら竹簡に記した史を読み、最初は生まれたときから聞かされてきた史とあまりに異なるのに信じることができず、しかしやがて、得心した。

「じきに春だ」

二月が過ぎるころ、久しぶりに晴れた空に輝く太陽が、屋根に積もった雪を溶かし、軒より落ちる水音が響くなか、笹葉は言った。

「汝はこれより如何する」

韓媛は、短剣の刃を、獣皮で磨きながら応えた。

「もうヤマトへは帰れない。吾は北へ向かう」

「北へ？」

「且波を越え、高志へ行く」

片隅で籠を編んでいた稗田阿礼が貌を上げ、膝をわずかに進めた。韓媛は続けた。

「高志には、御真木の大王が弟、彦湯皇子の三世の孫がいますと、東国で聞いた」

「三世の孫……」

笹葉は阿礼に問うた。

「阿母、そのような話を聞いたことがあるか」

阿礼は静かに首を振った。笹葉は韓媛に問うた。

「汝は高志に赴き、如何する」

「彦湯皇子の三世の孫を戴き、軍を興してヤマトを攻め、葛城を滅ぼした者どもを討つ」

阿礼がかすかに唇を歪めた。微笑みにも似たその歪みに、韓媛は眉を顰めた。

「一族を討たれた恨みは、忘れぬ」

阿礼は静かに立ち上がり、炉の灰に何かを書いた。笹葉はそれをのぞき込み、驚いて阿礼の腕を掴んだ。

「阿母も……高志へ行くのか？」

「高志への道を知っているのか？」

韓媛は阿礼に擦り寄った。阿礼は首を振り、また灰に文字を書いた。笹葉は笑い出した。「ただ、且波や高志の風土を知りたいか。阿母はやはり、史人だ」

数日後、いまだ残雪の残る山道を、三人の女が北へと歩いていった。

その頃、難波では稚建皇子が大王の位に即き、春日郎女は皇后となった。